

「公益」と「私益」をめぐる覚書

—『実業之世界』における三宅雪嶺と幸田露伴—

長 妻 三 佐 雄

1. はじめに

近代日本を代表する実業家である渋沢栄一は「公益」を追求した実業家として高く評価されている。^①「公益」と「私益」を対立するものとはとらえずに、長期的に見れば、「公益」を目標にすることが「私益」の増大になると考え、「公益」に通ずる「私益」を模索していた。「民」で実業家として活躍しながらも、私欲に振りまわされることなく、「公益」を志向していたのである。私欲と結びつきやすい商業の発展を考えると、「公益」と「私益」の問題を看過することはできないだろう。

日本が近代国家として成長していくうえで、殖産興業は不可避の要請であり、そのためには優秀な人材が「官」だけではなく、「民」にも数多く集まり、商工業界で尽力することが望まれた。政治の領域に

有能な人材が集中して商業や学問の世界で人材が払底してしまうと、民間は活力を失い、それは日本の競争力を弱めることになる。福沢諭吉が「官尊民卑」の風潮を改めようと苦心し、「独立自尊」の精神を強調したことはよく知られている。政治だけではなく、学問や商業の地位を高め、多元的な価値が対等に競合することが日本の近代化には必要であると考え、そのためにも、各分野で活躍する人びとが依存心を棄てて独立の精神を身につけることが何よりも大切であると考えたのである。^②

だが、福沢は「独立自尊」を重視したが、「一身独立して一国独立する」（『学問のすゝめ』）という言葉に見られるように、国家的独立の保持を大きな目標に掲げており、「独立」といっても利己主義や自己中心主義とは一線を画していた。日本の近代化にとって、商業の発

展は重要であるが、一般的には、「私益」の追求を第一に考える商業と「公益」の増進とは必ずしも両立するとは思われてはいなかった。しかし、福沢は「民」の活力を伸ばすことが日本の独立と発展のためには不可欠であると考えていた。国家の発展は「官」の力だけでは不十分であり、「民」の伸張と分かちがたく結びついていたのである。したがって、商業をはじめとする分野での「私益」の追求は「民」の

活力を高めることであり、それは日本の近代化を促す行為であった。「私益」の追求の背後に「公益」に対する関心が存在していたといえよう。ところが、周知のごとく、日露戦争後、国家的独立の危機が弱まると、自己の人生を日本の近代化と密接にリンクさせていた人びとは、自己のことを優先して考えるようになる（松本三之介『明治思想史』新曜社、一九九六年）。いわゆる「個」の覚醒という現象が幅広い階層で見られるようになる。元来、深く欲望と結びつくことが多い経済活動は自己中心的になり、「公益」をまったく配慮しないエゴイスティックなものになる危険性があった。「公益」と「私益」の間には深い溝が存在していたのである。そのなかで、懸命に「公益」と「私益」を結びつける論理を再構築しようとする言論人が登場してきた。自己の利益を追求するという商業の目的と広く世の中の人びとのために役に立つという大きな目標を一致させようと努力していたのである。

この拙い覚書では、そのような言論人の中でも、洪沢栄一などの実業人を高く評価しながら、自らは実業界と距離を置き、言論活動を進

めていた三宅雪嶺の議論を中心に検討したい。とくに、幸田露伴の文章を手がかりに雪嶺の商業観や実業論を考察していく。また、雪嶺が用いる具体例を多く紹介するが、そうすることで抽象的な議論ではすくい出すことのできない時代状況の一端を覗くことができると考えるからである。

2. 『実業之世界』をめぐる人びと

三宅雪嶺は『宇宙』などの哲学的著作で有名であると同時に、『同時代史』をはじめとする卓越した史論を著した近代日本を代表する言論人である。その雪嶺が野依秀市の主宰する『実業之世界』に実業家の資質や心得についていくつも文章を発表している。

では、どうして雪嶺は野依と親交をもつようになり、『実業之世界』に文章を掲載するようになったのであろうか。以下は、「三宅先生と私」という文章に見られる野依の証言であるが、記憶違いもあるかもしれない、さらに検討を要するが紹介しておこう。明治三十八年、野依は『三田商業界』の創刊経営にかかわるが事情があり、しばらく雑誌を離れることになる。ところが、和田豊治の斡旋で、再び『三田商業界』に復帰し主幹となり、明治四十一年五月に『実業之世界』に改題した。野依が演説会を開催する話を早川鉄治にしたところ、早川が雪嶺の「訥弁の雄弁」について語り、雪嶺に依頼することを野依に勧めたという。雪嶺の「訥弁」はよく知られていたが、それと同時に人びとの心を魅了する「雄弁」としても有名であった。そして、明治

四十二年、大隈重信の紹介で野依は三宅雪嶺に会いに行く。すると雪嶺は野依に洪沢栄一の知己を得るようになったいきさつを尋ね、さらに野依の奮闘ぶりを聞き、演説会の弁士を承諾する。これがきっかけで雪嶺は『実業之世界』に多くの文章を寄せるようになる⁽³⁾。また、のちに野依は幸田露伴を訪ね、露伴の文章も『実業之世界』に載るようになる。洪沢栄一などの実業家の文章に加え、三宅雪嶺や幸田露伴といった見識の高い言論人が『実業之世界』に文章を書き、単なる成功にあこがれる青年たちに処世術を施すようなものとは趣を異にしたユニークな雑誌が登場することになる。当時、公共的な精神を欠いて、金儲けのことしか眼中にない人びとが多く存在していた。また、いわゆる「成功青年」が多く登場して、青年たちの間でも、自己の経済的利益を追求することに汲々とするものが少なからずいた。「個」が限りなく利己主義的になり、金儲け中心主義とでもいうような風潮が強く見られたのに対して、雪嶺や露伴は、「相互扶助」の必要性を説き、公共精神や高い倫理意識を実業家に期待する。実業家であるからには、利益の追求は何よりも大切であるが、それは短期的な金儲けを意味するだけではなく、長期的に見て社会全体の利益になる事業、「世の中」の役に立つ仕事を行うことを力説したのである。そして、会社に勤める場合でも、単に給料のためだけではなく、自分の獨創性を活かして、その仕事で「世の中」に寄与することを説き、「生きがい」や「職分」という言葉を用いて、働くことの意味を強調する。経営者でも、会社員でも、仕事を通して「公益」に貢献することを強く

求めたのである。逆に言うとも、当時の社会の中では、「職分」や「公益」という概念を前面に押し出して、働く意義を説かなければならぬいほど、自己中心主義が蔓延して、「公益」と「私益」の乖離は甚だしかったといえるのかもしれない。

幸田露伴は雪嶺と並んで『実業之世界』の巻頭の文章を書くことが多かった。では、露伴は「公益」と「私益」をめぐるどのような発言をしているのだろうか。『露伴全集』の第二十八巻に「修省論」として『実業之世界』に発表した文章が収められている。『成功雑誌』にも文章を寄せており、それは「努力論」としてまとめられている⁽⁴⁾。また、露伴が『洪沢栄一伝』を書いていることも注目に値しよう。露伴は「修省論」のなかで「公益」と「私益」を区別する発想そのものを否定している。「徳」が「直心の美しき光」のことであり、表面的には違うように見えても、「公德」と「私徳」も基本的には同じ「徳」であるように、「公益」と「私益」は基本的に一致する。露伴は、いくつかの事例をあげて次のように論じている。ある人が人びとの役に立つものを発明すれば、それは私的な利益を増大させるとともに、地域や国の産業を活性化させ、すぐれた製品を通じて社会全体の利益にもなる。それに、「公益」を大切にすることは暮らしに役立つ商品を発明・提供して、人びとから信頼され、結果的に「私益」を増大させることになる。広く大きな視野で見ると、「公益」は「私益」と一致するのである。逆に、短期的な視点で自己の利益のために社会全体の利益を犠牲にする場合、長期的に見れば、自己の利益をも損な

うことになる。自分のことだけ考えて、魚を乱獲すると、結局のところ、漁場がなくなり、自己の損失になるのは自明の理である。したがって、「公益」を離れたところに「私益」は存在しないという。また、自己の利益を犠牲にした「公益」に対しても露伴は懐疑的である。「なまじ非才薄徳の分際で直接に公益を希圖として公共事業に心身を寄せたりなんぞするのは、却て真に公益を為し得るか何様か疑しい」と。「私益」を犠牲にして「公益」を志すことが、かえって「公益」につながらない危険性を指摘する。

そもそも「公益」とは何であるか。「公益」という言葉が自明のように使われる場合が多いが、実は複雑多岐にわたる概念であり、誰が、どのような基準で「公益」と「私益」を弁別するのも、定かではない。主観的には「公」のためと思いつながら、非常にエゴイスティックに行動していることも多々あるだろう。自分の行動を「公益」であると信じ込んでいるだけに柔軟な判断ができない場合もある。何が「公益」であると考ええるかは、立場によって異なるものであり、肝要なのは自らの立脚点を相対化して、広く「公益」を認識することであるが、それは至難の業であろう。短期的な視点で「公益」であると信じている事柄が、長期的な視点ではそうではない場合がある。また、ある立場から「公益」であると断定しても、別の角度から見れば害を及ぼしているのしか見えないこともあるだろう。元来、不完全な人間に「公益」を見通すことが可能かどうかは問題であり、さらにいえば、そのような「公益」が存在するののかも難しい問いであ

る。現実的には、少なくとも、「公益」を志向している場合でも、自分の立場を絶対化せずに、たえず異なる意見と出会い、自己の正当性を疑いながら、「公益」を追求すべきではないだろうか。

露伴にとつて、「公益」とは「私益」と区別して実体的にとらえられるものではなかった。各人が自分の仕事に忠実で、それぞれの職業で誠実にものをつくり、商いを営むことが、「私益」であると同時に「公益」であった。決して「私益」を排斥することなく、また、卑しむことなく、「公益」と「私益」とを区別する発想そのものを批判したことは特筆すべきであろう。「徳」においても「公」と「私」を区別することは意味のないことであり、また、「利益」を考える場合でも、より広い視野で見れば、「公」と「私」は一致するのであり、両者の相違は相対的なものでしかなかった。⁵⁾その根底には、人間が「相互扶助」を前提に生活しており、あらゆる営みが孤立したものではなく、共同性の産物であるという哲学が存在していた。それは次のような文章を見ても明らかである。「社会及び社会状態といふものは、生活の円満を欲する人間の欲求を其の存在の根底として居るもので、其の意義を簡単に言明すれば、相互扶助といふを外にしては、他に切な言語も無いのである」⁶⁾と。このように、「自分も人の為にする代り、人にも自分の為になつて貰ひ」という「相互扶助」を前提にする時、「私益」は「公益」であり、「公益」は「私益」であるという社会観が出てくる。逆に、「個」の覚醒とともに広がった利己主義的な考え方からは、「私益」と「公益」の間には架橋しがたい距離が存在し

ていたといえよう。

このように、「公益」か「私益」かという二者択一的な発想が多く、さらに短期的な視野での金儲け中心主義と公共的な精神の衰退が問題視される中で、「公益」と「私益」の一致を力説した露伴の言説は重要である。「公益」と「私益」の一致は理想ではあるが、「私益」を追求することが他者の利益と相反することが現実的である場合もあるだろう。むしろ、商業などの発展は欲望と深く結びつくものであるだけに、それが時として公的なものとは相容れないと考えることも一般的ではないだろうか。だが、そのような金儲け主義による利益の追求は長期的に見れば、自らの信用を失うだけでなく、社会全体の利益を損ない、世の中のためにならないために衰退していくと考える論者が少なからず存在していた。露伴もそう考えていたし、自らも実業家として活躍して「日本資本主義の父」とも称される渋沢栄一も商業の「職分」として、生産者と消費者の両者が栄え、まわりが栄えれば栄えるほど、自分の事業も盛んになると力説する⁷。いわば、生涯を通じて「公益」と「私益」の一致を志していたといえよう。ある意味では、政治や社会のことに何ら関心を示さないで「職域奉公」に陥ることもあるだろう。しかし、「相互扶助」を説き、人間を関係性の中にとらえる露伴の仕事観は、単なる「職域奉公」の枠には収まりきらない可能性を孕んでいるのではないだろうか。竹田純郎は土田杏村が社会進化論に対する根本的な批判と「相互扶助」の哲学を有していたことを指摘している。華厳経のことも含めて非常に興味深い視点であ

り、露伴の仕事観・「相互扶助」論にも有益な示唆を与えてくれるが、この問題に関しては稿を改めて検討していきたい⁸。

次章で取り上げる三宅雪嶺は、金銭に無頓着なことで著名であったが、しかし、世俗にもよく通じており、『世の中』等で実業家や「成功」について数多くの文章を残している。では、雪嶺は「公益」と「私益」の問題をどのように考えていたのだろうか。

3. 三宅雪嶺の『世の中』・『続世の中』

三宅雪嶺の名前は今ではあまり知られていないかもしれない。しかし、明治・大正・昭和を通じて活躍した言論人であり、明治期には多くの尊敬を集めた哲人であった。また、政教社グループの一員として、日本の「真善美」を追求して独自の哲学体系を構築しようとしたことでも有名である。当然のことながら、時代状況が変わり、読者の求めるものが変化すると、読まれる人物も移り変わる。雪嶺は、大正期に入ると、前世代の言論人として、以前のように支持されなくなる。だが、それが雪嶺の言説の価値を損なうものではない。また、忘れられた言説が豊潤な可能性を内包していることは雪嶺に限らず、よくあることである。なぜ、大正期に入ると支持されなくなってきたのかを考察することも重要であるが、ここでは雪嶺の言説そのものを少し検討していきたい。

雪嶺が明治末期から大正期にかけてのいわゆる「成功青年」に対し、単なる金儲けだけの成功ではなく、「独立心」と「独創力」を備

えた実業人になることを論じたことはすでに拙著『公共性のエートス』（世界思想社、二〇〇二年）において論じたことがある。財閥や政商に依存して媚び諂うことで「成功」するのではなく、「独立心」と気概、それに自らの人生を自分の判断で切り開いていくだけの「元氣」と積極性を要求したのである。もちろん、一人で仕事をできるわけではなく、他人と協力し合い、相互に扶助することの大切さは説いている。だが、その根底には、人びとが「依存心」をもち、馴れ合うような関係ではなく、一人ひとりが「独立心」をもちながら、共同する関係、いわば「独立共行」が肝要であると考えたのであった。⁹⁾「独立心」を有する人びとが各自の能力を開花させて、世の中で独自の働きをしていくことが「独創力」であり、社会の進歩にとって何よりも重要であった。「独創力」というと、何か特別な発明や発見を伴うように考えられるが、雪嶺の見えるところ、一人ひとりが潜在的に独自の能力をもっており、平凡に見える日常生活においても、派手さはなく、あまり注目されないかもしれないが、自分の能力を最大限に発揮することが、実は自分にしかできない貢献を社会に対して行っているのである、それが社会を進歩させる源泉であった。「財産と事業と性格」で「新発明新意匠は最も望まし」と話しているように、誰かの模倣をして事業を起こし、利益を得るのではなく、新しいことに挑戦して自分にしかできないことを通して社会に貢献することを重視していた。大倉喜八郎についても「随分変則なる手段を取り来つて、風上にも置けぬ代物とも考へられたが、着眼の大にして、思い立つた所を決

行するに勇なる、他の欠点を償ふに足るとも思はれる」と語り、着眼点や行動力・勇敢さに一定の評価を与えている。さらに高峰讓吉について、事業の規模は財閥に比べると小さいかもしれないが、「富に於て及ばなくても、進歩に益する所がある」と高く評価している。雪嶺哲学では、ほかの誰とも取り替えることのできない一人ひとりの能力を尊重することが「独創力」であったといえよう。¹⁰⁾このような考えは、何も雪嶺だけではなく、前述した露伴も有していたところのものである。すなわち、何か特別な公共のための事業をすることが「公益」を増進するのではなく、市井の人びとの仕事に対する真摯な営みが、それ自体として「公益」に寄与する。矜持を胸に仕事に没頭することが自らの可能性を伸ばして「私益」を産むとともに、それが世の中を豊かにして「公益」へとつながるのである。雪嶺も露伴と同じように、各人が独創的な仕事をするので、その仕事や作品を通して共同社会を豊かにしていくという「私益」と「公益」を一致させることを重視していた。¹¹⁾

だが、雪嶺と露伴が異なるのは、露伴が意識的に「公共事業」を志すことに必ずしも賛意を示していないのに対して、雪嶺は「公共事業」の意義を高く評価していることである。「公共事業」といっても、現代における道路建設やダム建設という意味での公共事業ではなく、広く人びとの生活に役立つような事業を非営利的な目的で行うことである。いわば、現在の言葉で言えば、社会貢献をはじめとする「公益事業」といったほうがいいだろう。前述したように、露伴は

「非才薄徳の分際で」直接的に「公共事業」を行おうとしても、どれだけ「公益」を増進することができるのか、疑わしいと考えていた。むしろ、あたかも五重塔をつくるのに無我夢中になって己の技量を超えた作品を作り出した十兵衛のように、職人氣質に支えられ、真剣に仕事に没頭することで潜在能力が開花し、世界を意味づける作品を生み出すことは世の中のためでもある。職人は伝統的な遺産を引き継ぎながら、社会との有機的な連関のなかで作品をつくっていく。たとえ孤独な営みであったとしても、人はそれぞれの歴史を背負い、生活空間の中で暮らし、共同性の刻印を受けている。その意味で、ものづくりはつねに共同作業であった。¹²卓越した作品は、社会を豊かにし、人びとが暮らす生活空間に新たな息吹をもたらす。職人はすばらしい作品をつくり人びとの生活空間を形成し、商人は誠実な商いで生産者のものづくりを支援し、それを使用する人びとの生活を豊かにする。各人が本業を通して「公益」に寄与することこそが、露伴の望んでいたものであった。少し飛躍するかもしれないが、露伴の職人観はハンナ・アレントの「仕事 (work)」に近い仕事観であるといえるかもしれない。主観がすでにあるイメージにしたがって制作するのではなく、一人ずつつくっていたとしても、先人たちの営みと他者との共同作業でものをつくる。そして、つくった作品は「世界」を構成する重要な要素となる。¹³露伴の職人たちがつくった作品も単なる消費財ではなく、五重塔のように生活空間を形作り、そこに意味を付与する「耐久財」であった。もちろん、雪嶺も、このような露伴の考えに賛同して

いた。それは、各人が自分の「職分」を果たすことで国家や社会に貢献することを重視していたことからわかるであろう。「所有欲と使用欲」という文章で、「己れの為めのみを念とせず、己れの為めにする事が、社会の為めに成るべき順序に於いて事を運んで行かうとする」と語り、「己れの為め」と「社会の為め」が一致すべきであると考えていたのである。¹⁴また、雪嶺も露伴と同じく当時の実業家のなかで「公益」と「私益」を一致させた代表的な人物として洪沢栄一を思い描いていた。¹⁵そして、銀行業の発展に粉骨砕身した洪沢の履歴が、洪沢自身の利益であるとともに数多くの起業家を育成し、日本社会全体に役立ったことを雪嶺は称賛している。「私益」と「公益」の一致、あるいは「公益」に通ずる「私益」を重視していた点で、雪嶺は露伴と同じ考えである。しかし、「私益」とは一致しない「公益」についても、雪嶺は一定の評価をしていた。本業を営みながら、別に「公益」のためにする行為も大切に考えていたのである。

雪嶺は成功した実業家がカーネギーのように多額の寄付をしたり、人びとの暮らしを豊かにする施設を寄贈することも実業家の社会貢献として勧めていた。経済的な利益を追求することを目標にする「成功青年」が増えてきたことを日本の近代化に寄与する出来事であると肯定的にとらえながらも、「公德心」や公共的な精神が衰退し、他者に対する思いやりや「相互扶助」の精神が希薄になることに警鐘を鳴らしたのである。それゆえに、本業で「私益」を得る一方で、その利益を本業とは異なる方法で社会に還元する行為も高く評価したのであ

る。「私益」とは別に「公共事業」を行うことも重要であり、寄付や慈善事業も「公益」に寄与する行為であった。

たとえば、雪嶺は「善く蓄へ善く散ぜよ」という文章を明治四十四年四月に発表しているが、そこで「近來の快心事」として岩本栄之助の百万円の寄付について記している。自分の財産の中からかなり大きな金額を慈善事業に寄付をする、それだけではなく、岩本の母親が「寄付の事が金持ちに迷惑を及びさへせねば宜い、又寄付したとて之を鼻にかけてはならぬ」と戒めたのを、雪嶺は高く評価する。そして、「上方贅六」といわれているが、現在の東京よりも上方のほうが岩本のように慈善事業に協力する人物が多いのではないかと¹⁶いう。岩本は株式市場で活躍した人物であり、彼の寄付によって大阪中之島の中央公会堂が建てられたことはよく知られている。また、「拝金宗の本場」といわれているアメリカで、日本の富豪よりも圧倒的に「公共事業」や「慈善事業」に力を入れる富豪が多いことを指摘する。スタンフォード大学でもカリフォルニア大学でも、富豪の寄付に拠るところが大きい。雪嶺は、カーネギーが「金を費やす」ことに強く意を払っている。莫大な金額を「慈善事業公共事業」に投じたことを繰り返し述べている。アメリカでは、事業で成功した富豪たちが競って世の中のために寄付をする習慣があり、雪嶺は、その習慣を賞賛して、日本の富豪に対して、金儲けだけではなく、それを有効に使う必要性を説く¹⁷。日露戦争後、「成功青年」が台頭してきて実業雑誌もいくつか発刊された。実業に対する世間的な価値意識も高まり、経済的な成功を目標

にする若者が数多く登場してきた。しかし、アメリカのように、経済的成功が名声を得るようになったのだが、富豪が寄付や慈善事業を率先して行うという習慣がない。寄付や慈善事業の是非はともかく、日本の実業家における公共的精神の欠落をきびしく批判したのである。大正二年十月の「親の財産」では、村野山人が財産六十万円のうち十万円を費やして乃木神社を設立し、残りの財産で工業学校をつくったことを賞賛している。ここでも、岩本が公会堂を設立したことについて言及し、村野も関西の人物であったことから、「贅六」と呼ばれている関西から公共精神のある実業家が登場していることを強調する¹⁸。関東に比べて「民」の力が強く、公共性とは距離があるように見えながら、「民」で活躍した人物が公共的な建物や学校を設立したことを雪嶺は高く評価していた。

もちろん、実業家が単に寄付をするよりも、その資金で何か社会に役立つ事業を行うことを雪嶺は勧めていた。だが、とりわけ日露戦争以降、露伴が考えていたような「公益」と「私益」の一致を実現する仕事は難しくなり、自己の利益を得る事業と社会に役立つ事業の間に架橋がたい裂け目が出てきたのではないだろうか。近代的な組織に会社も移り変わると、仕事の成果を出すサイクルが短期間になり、短期的な視点での「公益」は副次的なものと考えられる。どうしても短期的な限定された視点で利潤を追求することが優先されてしまい、そうになると、「私益」は「公益」と一致しなくなる場合が多くなる。それが、「私益」を求める事業の追求を行うことで利益を得る行為と、

その利益をもとに社会に還元する行為を分離することが一般的になった理由であろう。それゆえに、雪嶺は、幸運にも、「公益」と「私益」が一致する場合にはそれが最善であるが、一致しないときでも、実業家が自らの財産の中から一定の金額を寄付するという行為、また、「余芸」というかたちで社会に利益を還元する事業が重要であると考えたのである。¹⁹⁾

このような「慈善事業」や「寄付」を勧める背景には、雪嶺が「公益」と「私益」の乖離を深刻に受け止めていたことが挙げられはしないだろうか。日本でも、資本主義が発達してきたが、そのとき、社会進化論が新しい意味を持つて受け取られる。スペンサーの社会進化論が近代日本に与えた強い影響は夙に先学の指摘するところである。明治中期に紹介されたとき、日本が西洋に追いつくことが目標であり、進化の要因を探るために進化論が多くの論者によって研究された。もちろん、政治的な支配の正統性を主張するために援用されることも多く、各人の立場から進化論は都合よく利用された側面も否めないだろう。²⁰⁾だが、明治末期から大正期にかけて、日本が経済発展していくなかで、競争が激しくなり、格差が大きくなる。当然、庶民の間で格差に対する不満が生じるとともに、富豪のほうにも、競争社会の肯定と自らの富の正当性をどこかに求めようとする機運が生じる。国際社会での熾烈な競争や国内での貧富の差の拡大などが重要な課題となり、その結果、「優勝劣敗」の法則が改めて脚光を浴びる。アメリカでも、自らの富を肯定する論理として進化論が流行し、スペンサーがア

メリカを訪問したとき、多くの富豪たちが彼を歓待したという。²¹⁾自由主義経済が進展する中で、自らの能力を開花させて激しい競争に勝ち残り経済的な成功を得ることが、社会進化論によって肯定的に認識されるようになる。

また、それとともに、事業によって得た富を社会に還元することが富豪たちの使命になる。競争の結果、貧富の格差が広がる。しかし、その格差を固定することなく、多くの人がびとに教育の機会を与えるための学校などが富豪たちの寄付によって設立されることになる。いわゆる「富の福音」(カーネギー)がもたらされるのである。²²⁾

雪嶺は社会進化論を重視していたが、必ずしも「優勝劣敗」という考え方に共感を覚えてはいない。むしろ、多様な個性の共存を望んでいたことは、すでに論じたことがある。²³⁾ただ、日本が各国と競争していかなければならないと考えており、そのためには国民一人ひとりが自らの可能性を開花させ、奮闘して競争する社会を肯定的にとらえていた。アメリカの発展に対して、それを見習うべきであると考えていたが、それと同時に、学校設立などに見られるアメリカの富豪の社会貢献は日本の富豪にとっても学ぶべき対象であった。雪嶺は「人格と金銭」という文章で、アメリカのエモス・ローレンスが「たとへ世界の富を得るも、自の魂を失へば、何の得る所があらう」と書付けを残していたことを紹介している。そして、雪嶺自身、「金力は大なるものであるが、其大なると共に、動もすれば、自の魂を失ふことになり。魂を失はず、よく金力を活用し、茲に始めて、金力の真の価値を

認め得るのである」とコメントしている。²⁴日本でも自由競争の発展により、貧富の差が拡大してきた。社会問題が注目されてきたのも、日露戦争後から大正期にかけてのことである。新しい産業が興り、その波に乗ることができた人びとと、その変化をとらえ切れなかった人びとの差を鑑みると、「公益」と「私益」は一致するというだけでは社会問題は解決しないと考えたのであろう。むしろ、日本の富豪もアメリカの富豪を見習って、寄付や慈善事業に貢献することが重要であり、また、社会的に貢献するような事業を立ち上げることも肝要であった。

日本では、とくに大正に入ると、シーメンス事件のような「コミッション」が問題になり、本来「公益」に専念すべき人びとが「私益」のために翻弄されることになる。公務に携わる人びとが「私益」の追求のために汲々としている姿を目の当たりにした雪嶺は、このような状況を「精神的腐敗の頗る恐るべきものがある」と述べ、日本社会で「公益」を顧ずに「私益」が大切にされる風潮に警鐘を鳴らしたのである。²⁵それゆえに、「私益」とは別の次元で「公益」の追求も要請したのである。「公益」とは何かという根本的な問いが大切なものというまでもないことだが、しかし、貧困問題をはじめ、数多の社会問題が起こってくる中で、たとえ短期的な視点であったとしても、寄付や慈善事業をすべきであると雪嶺は考えたのであろう。

また、「公益」と「私益」をめぐる雪嶺と露伴の違いの根底には、資本主義が発達することにより、日本社会において伝統的な「職分」

観念と「職業」意識の乖離が拡大したことが指摘されよう。「職分」とは各人に「天」から与えられた能力であり、役割である。一人ひとりが自分のなかに潜在している固有の可能性を開花させることが、人にとつて何よりも大切であり、その固有の才能を発揮することが社会全体を豊かにするのであった。²⁶いわば、英語の *Calling* やドイツ語の *Beruf*とも近い観念であり、「生きがい」と密接に結びついた言葉だといえよう。「職分」は受動的であるがゆえに固有のものであり、しかも人が有機体的な共同性の中で与えられたものである。「職業」は、現実の社会になかで生活するうえで必要な経済的基盤を得るためのものであり、営利活動と深く結びついている。これらが一致していた時代には、自らの仕事を通して社会に貢献し、「公益」と「私益」も不可分に結びついていた。長谷川如是閑が語る隠元豆の煮物をつくる職人の姿は、「職業」と「職分」が一致したものであった。職人気質によってこだわってつくられた豆、それを売るにも一定の作法があり、損失を出してもその作法を守り通した。そして、煮豆作りを通じて社会と職人は深くつながっていたのである。如是閑は、そのような煮豆作りの職人を懐かしく思い、敬意を払っている。²⁷ところが、明治末期から大正期以降、「職業」に就いてはいても、「職分」を意識している人はどれだけいたのだろうか。如是閑が昔を懐かしむ背景には、先ほどの豆の例で考えるならば、煮豆を販売して利益を得る行為が何よりも重要になり、上質の豆をつくり出す作法はコストがかかりすぎて敬遠されるようになった現状があったのではないだろうか。そうなる

と、一部の職人は自分のつくる豆に生きがいを感じることができず、煮豆作りも単に「利益」を得るだけの行為になる危険性がある。もちろん、そのなかで、「職分」と「職業」を一致させようと苦心する職人も多く存在していただろう。だが、たとえば、利潤中心の考え方が社会に浸透する中で、さまざまな形態で働く人びとが、どれだけ「職業」と「職分」の一致を実現できたであろうか。その場合、「私益」を得る行為と、その「職業」を通して社会に貢献する「職分」とは分離することが多い。

とくに商業の場合、その乖離は深刻であり、雪嶺は商業と倫理の問題について次のように記す。

「旧幕時代に士農工商の順序立ち、単に商人の踏みつけにせられ、たばかりでなく、品性も頗る卑しむべきであつて、通商貿易を盛んにせねば成らぬ事となると同時、商人の位置を高むるの必要を生じたが、何分にも従来の惰力で、如何にも下劣の形蹟がある。

士族が商法に従事したのは、これを矯正するの効あるべき筈であつて、何れだけ効の顕れたとすべきであるが、多勢に無勢か、士族が商人の風を改むるよりは、士族が商人の風化するの傾きであり、商人の風に化するのが、成功すべき重なる条件であるかと思はれた⁽²⁸⁾。

このように、雪嶺は商業に高い倫理意識と士族の持つ公共的な精神を根づかせようとしていたが、逆に士族で商業に転じた人びとが私益第一になつて、これまでの公共的な精神を失いつつある。しかし、世

界を相手に商業をしていくためには、イギリスの商人のように、「英国はゼントルマンの本場であると云はれるが、其の起りは士族の階級から出て居るにしても、世界を相手に商業し、権利義務を確実に知つた所が與かる事少なくない」と高い権利・義務意識を持つ必要がある⁽²⁹⁾。権利が大切であるのはいうまでもないことだが、商業を営む上で遵守すべき義務も重要であつた。さらに、雪嶺は「軍人道及び商人道」という文章を書き、次のように述べている。「現在の実業家は、何うも未だ従来の町人根性といふものが残つて居るやうである」

と。すなわち、「只金さへ儲ければそれで好い」のであり、「現に最も尊ぶ所は智と勇とで、仁の如きは何うでも好いといふ事になつて居る。只機智に富み勇氣に満ちて居れば金がでる」というような意識が当時の商人にあると雪嶺は指摘する⁽³⁰⁾。そして、商人にとって、「仁」も大切であり、「商人道」というべき高い倫理意識で行動することを要請したのである。「正直は最良の手段」であり、単に経済的な成功を目指すだけではなく、広く人びとの生活を益する商行為を行うことを説いたのである。もちろん、「紳士の蛮的分子」という文章で記しているように、激動の時代には、「物事に角が立たず温良恭謙讓、如何にもツキが良ささうである。風采も心の持ち方も、人の気持を害する事が無く、如何にも品がよいと思はせる」だけではなく、大胆に冒険する精神が必要であり、しっかりと自分の考えを持つことが大切であつた⁽³¹⁾。

4. おわりに

このように、雪嶺も露伴と同じく、基本的には「公益」と「私益」は一致すべきものであり、自分の仕事で「私益」を得るための「職業」であるとともに、「生きがい」でもあり、その仕事を通して社会に寄与する「職分」であるべきだと考えていた。だが、雪嶺の見るところ、とくに明治末期から大正期にかけての「成功青年」が台頭してくる風潮の中で、多くの青年たちの脳裏において「職分」意識は希薄になってしまったのである。仕事自体に「生きがい」を求めるとも、単に利益を得ることが目的になったのである。この「生きがい」と仕事の分離、あるいは「職分」と「職業」の乖離は、本来的に一致すべきはずの「公益」と「私益」の間に大きな溝をつくることになった。雪嶺は「職分」意識を高めるために、『実業之世界』などで、青年たちに対して「独立心」や「独創力」を説く。そして、「天」から与えられた自らの能力を開花させて社会に貢献することの重要性を繰り返し訴えたのである。「公德心」を失い、「私益」の追求に明け暮れる人びとがいるなかで、「公益」と「私益」を一致させ、とりわけ成功を求める青年たち、実業家たちに、高い倫理意識と「公益」を志すことを望んだのである。しかし、雪嶺は、激しい競争社会のなかで、貧富の差が大きい現状を見て、実業家が積極的に「公益」に携わるべきであると考えていた。実業において「公益」に通ずる「私益」を志すとともに、実業で得た利益を慈善事業や学校経営を通して社会に還元すべきであると力説したのである。「職業」と「職分」の一致、「公

益」に通ずる「私益」を目指しながらも、雪嶺は、現時点では、「私益」を肯定すると同時に、その利益を活用して「公益」を増進することを望んだのであった。これに対して、露伴はあくまでも自らの仕事に専念することで社会に益することにこだわり続けたといえるだろう。明治末期には、すでに崩壊しつつあった「職分」と「職業」が有機的に連関している社会に露伴の視線は注がれていた。露伴にとって、「公益」とは職人氣質をもって自らの仕事に没入することで、実現できるのであり、そこを離れて意識的に「公益」を志向しても容易にたどり着けるものではなかった。逆説的だが、容易に世の趨勢に阿らなかつた露伴の言葉が、理想的であるがゆえに今なお強く語りかけてくるのも確かである。だが、そこに期待するだけでは、解決のできない問題が山積しており、雪嶺のように具体的な問題にできる範囲で取り組むことも、また、必要であろう。ただ、雪嶺にとつても、「公益」とは実体的にとらえられるものではなく相対的な概念であり、つねにその内容を吟味しながら懐疑的に追求されるべきものであった。

註

- (1) たとえば、渋沢研究会編『公益の追求者・渋沢栄一』（山川出版社、一九九九年）などを参照されたい。
- (2) すでに数多の福沢研究があり、そこで福沢の「独立」について語られている。やはり丸山真男著・松沢弘陽編『福沢諭吉の哲学』（岩波文庫、二〇〇一年）に収められた福沢論は「独立」の問題を考えると、必読の文献であろう。拙稿「三宅雪嶺と商業の精神」（木岡伸夫

『比較文明的アプローチにおける技術と自然の変容過程序説』所収、平成16年度～平成17年度科学研究費補助金研究成果報告書』でも簡単にまとめておいた。ここでは、拙稿の記述を参考にしながら、必要な範囲で記した。

(3) 野依秀市編著『三宅雪嶺先生を語る』(帝都出版、一九四七年)所収の野依「三宅先生と私」を参照。ここに雪嶺と野依との関係がくわしく叙述されている。また、松尾尊亮「大正デモクラシーの群像」(岩波書店、一九九〇年)の「明治末期のルソー」でも、野依と雪嶺のことが少し紹介されている。

(4) 幸田露伴の「努力論」については、吉田公平「幸田露伴の『努力論』と陽明学」(『季刊 日本思想史』五七号、ぺりかん社、二〇〇〇年)がある。なお、『季刊 日本思想史』の本号は「幸田露伴と漢学」特集号である。

(5) 幸田露伴「修省論」(『露伴全集』第二十八巻、岩波書店、一九五四年)三六一―四一頁。

(6) 同右、二一四頁。

(7) 渋沢栄一『青淵百話』(東京同文館蔵版、一九二二年)を参照。

(8) 竹田純郎『モダンという時代』(法政大学出版局、二〇〇七年)第一章と第二章を参照。なお、柳田泉『幸田露伴』(真善美社、一九四七年)で、柳田が「あゝ、大露伴今や亡し、私は、せかず、先生が、ぜひよめといった『華厳経』でもかちりよみしつ、そろそろと驚鈍をつくしていかうと思つてゐる」と語っているのも興味深い。五頁。

(9) 雪嶺が福沢の「独立自尊」に共感を抱きながら、それが利己主義的に理解されないように「独立共行」を提唱した。このことは、拙著『公共性のエトス』(世界思想社、二〇〇二年)で説明したことがある。

(10) 三宅雪嶺『続世の中』(実業之世界社、一九一七年)

(11) 三宅雪嶺と幸田露伴を比較して、その哲学の類似点と二人のエピソードが柳田泉・勝本清一郎・猪野謙二編『座談会 明治文学史』岩

波書店、一九六一年)に出てくる。

(12) 「作る」ということに関して、伊藤徹『手としての人間 柳宗悦』(平凡社、二〇〇三年)が参考になり、多くのことを考えさせられた。

(13) Hannah Arendt, *The Human condition*, The University of Chicago Press, Chicago 1958 (志水速雄訳『人間の条件』(中央公論社、一九七三年))。

(14) 三宅雪嶺『世の中』(実業之世界社、大正三年)四五七―四六四頁。

(15) 雪嶺の渋沢観については、前掲『公共性のエトス』で検討したところがある。ここでも、拙文を参考にしたが、それだけでは十分ではなく、雪嶺と渋沢栄一に関しては、いずれ稿を改めて詳細に検討したいと考えている。幸田露伴には『渋沢栄一伝』(岩波書店、一九三九年)があり、また、雪嶺と露伴の両者に親炙した柳田泉が『哲人三宅雪嶺先生』(実業之世界社、一九五六年)と前掲『幸田露伴』をのこしているのも注目すべきであろう。

(16) 三宅、前掲『世の中』四六四―四六九頁。

(17) 同右。

(18) 同右、四九一―四九七頁。

(19) 同右、五一六―五一七頁。

(20) 近代日本における社会進化論の影響については、山下重一『近代日本とスペンサー』(御茶の水書房、一九八三年)、松本三之介『近代日本における社会進化思想(1)』(3)『駿河台法学』7巻1号・11巻2号・16巻1号、一九九三年・一九九八年・二〇〇二年、木岡伸夫・鈴木貞美編『技術と身体』(ミネルヴァ書房、二〇〇六年)などがある。また、松田宏一郎『儒学と社会ターウィニズム―日本のケースを中心に』(朴忠錫・渡辺浩編『文明』「開化」「平和」―日本と韓国)慶應義塾大学出版会、二〇〇六年)はとくに注目すべき研究であり、参照されたい。雪嶺と進化論についても、中野目徹『政教社の研究』(思文閣出版、一九九三年)があるので参照されたい。

- (21) 本間長世「社会進化論とアメリカ」『社会進化論』（アメリカ古典文庫、研究社、一九七五年）を参照。
- (22) アンドルー・カーネギー著・後藤昭次訳「富の福音」前掲『社会進化論』所収。二四八―二七八頁。原題“*The Gospel of Wealth*” 1889
- (23) 前掲『技術と身体』所収の拙稿「進化論受容の諸相」を参照された
い。
- (24) 三宅、前掲『世の中』五〇―五〇六頁。
- (25) 三宅、前掲『続世の中』に「コムミッション」という文章が掲載されている。
- (26) 前掲、拙著『公共性のエートス』でも第三章で「職分」について検討した。小稿では、それを受けながら、「公益」と「私益」の問題を露伴の文章を手がかりに再検討した。露伴との比較、「公益」と「私益」の分裂という視角を入れることで、拙著よりも「公私」や「作為」の問題に新しい知見を加えることができたと考えている。
- (27) 長谷川如是閑『額の男』（政教社、一九〇九年）にこの挿話がある。
- (28) 三宅、前掲『世の中』四五―四五七頁。
- (29) 同右。
- (30) 同右、四三〇―四三八頁。
- (31) 三宅、前掲『続世の中』を参照。